

事例

4 3

# 接続語に着目しよう（六年）

## 「言い換え」に挑戦（六年）

—「海の命」と関連させて—

大阪府大阪市立磯路小学校教諭 高井大輔

### 事例3 接続語

語彙の拡充といっても、やみくもに辞書にある語を覚えさせるのではなく、その語の使用頻度や汎用性を考慮し、身につけるべき語句の優先順位を考えて指導することが大切です。その点からすると、「接続語」(ここでは、前の文の内容を受けて、次の文の方向性を示す働きがある言葉をそうよびます。品詞分類上は接続詞ではなく、副詞や指示語とされるものも含みます)は汎用性が高く、国語科で優先的に指導すべき語であるといえるでしょう。

そこで、「接続語カード」を用いて、使用を意識づけ、使用頻度を高める指導を行いました。

「接続語カード」は、名刺くらい大きさのカードです。板書する際に、子どもがその語を使用したときや、子どもにも使用していました。

また、「書くこと」の指導でも、「なぜなら?」「たとえば?」と問うことで、量を書けなくて困っている子どもの支援することも可能です。半年ほど使い続けると、書き言葉の中にも接続語が積極的に用いられるようになります。

このように、「接続語カード」を用いることで、自然に「接続語」の使い方身につけ、論理的な思考ができるようになっていきました。

### 事例4 言い換え

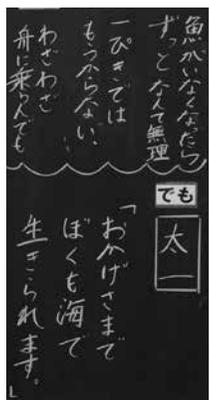
語彙を広げるためには、たくさんの語と出会うことが必要です。それだけでなく、出会った語が、子どもがもっている語の体系に位置づけられるようにすれば、その語は、その子にとって使える語となるでしょう。

出会った語を体系づけるとはどういうことでしょうか。似た意味の語を、リストに加えるだけでも体系化といえるでしょうが、それだけでなく、その語を具体的・抽象的

促したいときに黒板に貼ります(※1)。

使用するカードは左の六種類です。この六種類は、思考を促す働きのあるものを選んでいきます。

- 「でも」(逆接的に考える)
- 「なぜなら」(因果関係を考える)
- 「たとえば」(具体化する)
- 「つまり」(要約・抽象化する)
- 「たぶん」(推論する)
- 「もし」(仮説的に考える)



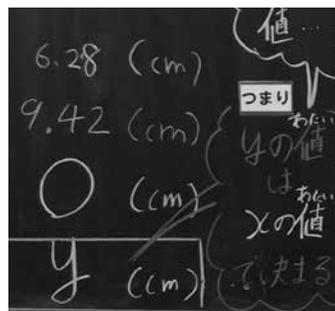
▲※1 接続語カード「でも」の使用例

このカードは、国語科に限らず、他の教科の板書にも使うことができます。下段の写真(※2)は、算数科での発言を板書し、

「千びきに一びきでいいんだ」という与吉じいさの言葉に着目し、与吉じいさが言いたかったことを別の表現で「言い換える」という活動を設定しました。「言い換える」という表現活動を通して、与吉じいさの言葉を、抽象化したり、逆の意味の言葉で捉えたりすることがねらいです。

子どもたちは、「千びきに一びきでいいんだ」という言葉の意味を考え、それを言い表すのにふさわしい言葉を考えました(※3)。例えば、「海を守る」「海を」次世代に残す」という言い換えを行った子どもたちは、具体的なじいさの言葉を「抽象的に言い換えている」といえるでしょう。いっぽう、「欲張るな」という言い換えは、「欲張る」という「逆」の意味の語を用いた言い換えです。他にも、太一と与吉じいさの関係を踏まえて、「(じいさの考え方に)共感してほしい」というじいさの背景を示す言い換えも見られました。

活動中は、辞書を使って、言い換えられそうな語を探す姿や、言いたいことをどんな言葉で表すかということに熱心に話し



▲※2 算数の授業での使用例

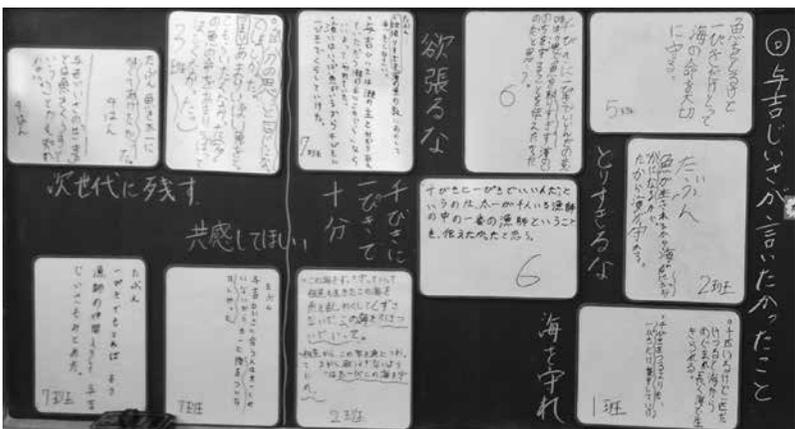
たものです。xとyの関係についての学習の際、教師が「つまり」を黒板に貼り、一般化した発言を促す、という用い方をしています。

使い始めのうちは、カードが貼られるだけで盛り上がり、接続語を使おうと意欲的になる子どもも多く見られました。また、授業後には、どんな接続語が使えたかを板書を通して振り返ることもできます。

使い続けていると、子どもどうしの交流

合う姿が見られました。また、「言い換え」を交流することで、そんな表現があったのか、と感嘆する場面もありました。

このように「言い換え」は、子どもが主体的な表現者となりうる活動です。自らが表現者となることで、積極的に語彙を広げようとする姿が見られました。



▲※3 「千びきに一びきでいいんだ」の言い換え